

新しい時代の学校づくりに関する一考察

西 俊 六

はじめに

中高一貫校の導入、完全学校週五日制の実施、小学校、中学校、高等学校における新しい学習指導要領の実施、「総合的な学習の時間」の導入、従前の相対評価からいわゆる絶対評価の導入等教育改革の波が次から次へと、学校現場へ押し寄せている。

一方、児童生徒をとりまくさまざまな教育課題、不登校などの学校不適応に係る問題が全国的に増加の一途をたどっている。

例えば、文部科学省問題行動調査によると、平成十四年度の不登校（三十日以上欠席）の状況は全国で小学校二五、八六九人（比率〇・三六）、中学校一〇五、三八二人（比率二・三八）。平成三年度に調査を開始した際の全国の状況は、小学校一二、六四五人（比率〇・一四）、中学校五四、一七二（比率一・〇四）であり、当時と比較しても、数値は高くなっている状況である。少子化で生徒の実数は減じている一方で、比率は上がっている。

岩手県においても、平成十四年度の状況は、小学校二二五人（比率〇・二七）、中学校一、〇八五人（比率二・三八）、高等学校四九八人（比率一・二三）。平成三年度の岩手の状況は小学校一三一人（比率〇・一二）、中学校五六七人（比率〇・九二）、高等学校五三八人（比率〇・九一）である。岩手においても比率の数値は上がっている。

しかし、このような課題を含みながらも、「個性重視」、「生涯学習」、「国際化・情報化」、「少子・高齢社会」、「環境教育の問題」等の教育実践が教育行政や学校現場において粛々と行われており、子どもたちが

明るい希望や夢を抱き、日々の学びに瞳を輝かしながら通学しているのも事実である。

そこで、教育改革が推進されている現在、学校は今後どのように生き抜いていくのがよいか。教員養成に携わる者として「学校づくり」について述べてみたい。

一 示唆に富む旧制第三神戸中学校初代校長近藤英也の学校づくり

私は教育の営みというのは、手を施したから直ぐ新たな姿や形として、目に見えるものとして威力を発揮することにはなかなか馴染まないものであると考える。

なぜならば、教育の究極の目的は人格の陶冶であり、崇高な理念に向かって努力を継続する過程のなかで徐々にしかも着実に現れてくるものと考えているからである。

ここに、岩手県沢内村出身で、旧制第三神戸中学校初代校長近藤英也先生の「全人教育」について述べてみたい。

旧制神戸第三中学校（現兵庫県立長田高等学校）は、創立は大正十年（一九二一）である。

四月の開校式に当たって近藤校長は、「本校は、立派な人格を有する紳士たらしとする者を養成するにあつて、単に上級学校への準備をして能事終われりとするものではない」と宣言。第一次世界大戦後の好況にのった進学ブームのなか、神戸市内にも三番目の中学校ができた。

明治二十九年創立の神戸一中(現神戸高校)、定員一七〇名に対して志願者は八四一名、神戸二中(現兵庫高校)も五倍の志願者が殺到し、新設校への期待が膨らむ。そんな中での近藤校長の「人格教育宣言」は大胆かつ新鮮だった。

この時、近藤校長は五十二歳。これまで二十六年間の現場経験を重ねている。母校の岩手師範学校在職四年、宮崎県都城中学校在職六年、兵庫県豊岡中学校在職十四年、第二神戸中学校在職二年、うち十九年間は校長職。近藤校長の宣言は長い間胸中に培っていた自らの教育心情を正直に、自信をこめて公言したものであった。

もとより、「全人教育」の主張や構想は近藤校長の専売特許ではない。大正時代にはいつて、欧米の自由主義や民主主義思想が流入され、教育界にも新教育運動の新しい波がわき起こっていた。

新教育運動の大物リーダーは沢柳政太郎であった。文部次官や東北帝大、京都帝大の総長を歴任した人物である。身近な実践者としては、近藤校長の東京高師時代の一年先輩にあたる野口援太郎、明石中学の山内佐太郎等がいる。近藤校長は、ソクラテスの著書の愛読者で、顔も幾分似ているとあって、あだ名は「ソクラ」。神戸の父兄、生徒や市民からも信頼があったという。^(注1)

近藤教育の特色は、「天は無用の人を造らず。何人にも恵まれたる一芸一才がある。これを見出し、これを啓発していく」ところにあった。個性尊重、落第生は出さない。そのため教育環境づくりをどう図るかであった。成績の席次も付けなかった。級会(現HR)の導入も斬新だった。週一回の話し合いの時間を大事にさせた。「あまり結論を急いではないけない。徹底的に考えさせ発表させる。そのあいだに考え方の訓練も表現法も分かってくる。自己を反省し他を批判することも分かってくる」と担任教師を指導した。

神戸三中は開校の翌年に「父兄常務委員会」を発足させ、教師と保護者との連携を確かなものとしていった。地元は三中の生徒を「^(注2)三中山さん」と呼び、「小さな紳士」とも呼んだという。

近藤校長は、「中学生の教育は大変難しい。十二歳から十八歳までは、人生のうちで生理的にも、精神的にも一大変化を起こす時期である。この時一步を誤れば取り返しがつかなくなる。一家一代無茶になるもこれを源にする。身体ばかり大きくなり、学問ばかりして、それで人間の栄枯盛衰は定まらない。人間の魂をつけないければなりません」と、いつも父兄側の学校教育に対する協力の重要性を訴えていた。

近藤校長は、神戸三中で一番熱を入れたのは、教師の鍛錬であった。学校教育の善し悪しは、直接生徒に向き合う教師の質によって左右される。近藤校長は、「自分はもっぱら諸君を教育する。そのため各自はできるだけ努力せよ。諸君はどうか生徒をしつかり指導して欲しい」と絶えずハツパをかけたという。神戸三中には、二つの学校があったという。生徒が教師から学ぶ。その教師は校長から学ぶという二重教育機関になっていた。近藤校長はその時々テーマを教師に与え研鑽を課した。そのレポートは職員会議で議論され、最後に校長が批判総括する。若い先生たちにとっては骨身にしみる修練の場であった。職員会議はおおかた近藤校長のレクチャーであった。職員会議は早くて八時九時、普通は十時十一時になる。結果として、知らず知らずに三中教育魂が培われていった。

神戸三中の先生方にとって、近藤校長は厳しい師であり、親父の如き存在であったという。^(注3)

旧制第三神戸中学校の教育目標は、校舎の建つ神撫(かんなで)の地名に由来し、「神撫教育」と命名したのである。

智、徳、体の何れにも偏せず、これを調和統一して発達せしめ、健全な人格的基礎を築かしめること、これその一である。

天は無用の人を造らず、何人にも恵まれたる一芸一才がある。これを見出し、これを啓発し、以て職業的方向を自覚するにいたらしめること、これその二である。

学問をして自己を知り、人間を知り、自然を知れば、自ら人間の生活す

べき真の道即ち生活の指導原理を知るに至る。この原理を把握するに至らしめること、これその三である。

この「神撫教育」が近藤英也校長先生の胸像の裏面に刻まれている。さらに、昭和六年十月五日、創立十周年記念式典に際し、近藤校長がかねて抱いていた教育理念を成文化し、「開門章」と名付けて生徒に配布した。昭和三十六年五月六日、創立四十周年に当たって、開校以来の歴史と伝統をしのぶために、「開門章」が再刊され、それ以来今日まで、入学式の当日、新入生に配布されている。

二 教育理念の小冊子『開門章』（全文）

「開門章」は十ヶ条から成り立っている。

一 序言

此の小冊子は第三中学校生徒の心得置くべきことを簡単にかき記したものである。難しい字句もあると思ふが其れは追々に分つて貰ひたい。諸子は縁ありて当校に來り学ぶこととなつたもので決してかりそめの事ではない。故に余は諸子に最大なる望みを囑し神かけて日夜に其の成業を祈りて居る。先生方は亦如何なる労苦に堪えても諸子の修行を貫徹せしめねば已まぬと努力して居られる。諸子よ光陰は過ぎ易く再び來らず。唯深く自ら決心して全力を修行に捧げ与えられたる此の五年の間に於て完全なる發達を遂げあつた入学の目的を達せよ。

十周年記念の日 第三神戸中学校長 近藤英也

二 入門第一の鍵

(一) 第三神戸中学校に入るものは先づ「入門第一の鍵」といふものを握らなければならぬ。此の鍵を握ることが出来なければ折

新しい時代の学校づくりに関する一考察

角入学しても畢竟徒事となる他はない。

(二) 「入門第一の鍵」を握るとは「願」を立つることである。「願」とは「中学校教育を受けて一人前の立派なる中堅国民になりたし」といふ熱烈なる願望の事である。

(三) 軽い意味の志やただの希望といふやうな事は「願」とはいへない。神を動かし仏をも感じさせるやうな強い強い願ひのことである。

(四) 「願」は強く考えて自ら悟るべき「一大事」にて他人より貰ひ受け又は教え授けられて出来ることではない。父兄や先生の意見を聞き指導を受けることは固より必要ではあるが結局「一代の間に自分は如何なる人物となり何を目当てに生きていくべきか」といふことにつきて深く自ら考えた結果でなければならぬ。

(五) 「願」がなければ修行の必要はない。学校に入ることも無用の事である。的なき矢は放つ必要がなく楫なき船はやるに及ばぬと同様である。

(六) 「願」は自己に対する誓であるばかりでなく天地神明に対する誓であるから度々変更すべきものではない。且や人生は短く光陰は還らず一代唯一の「願」に活くるを常態とすべきである。

(七) 人間は二度生まるゝといつてもよいのである。一度は身体を以て生まれ一度は「願」に生まるゝのである。初めの生まれは動物的の生まれであるが後の生まれは人間的の生まれである。「願」なきものは人間としての意義をもたぬ所謂醉生夢死の徒である。

(八) 此の「願」は第三神戸中学校の教育の門を開く鍵であるが又一代の運命を開拓する鍵ともなる。故に之を「入門第一の鍵」といふのである。

三 修行の決心

(一) 願あれば必ず「行」(ぎやう)がなければならぬ。行は願を成

就する唯一の道であるからである。行とは修行の事で心身を統一して願の方向に活動せしむることである。

(二) 人間の行路には悪魔障碍が多い。吾目の体内心中にさへも潜んで居り又外部からも沢山現れて来てなまやさしき修行者を征服し敗滅に帰せしむるのである。

(三) 「行」は非常の決心を要する。熱誠鬼神を泣かせ勇氣万難を排するの慨なくば成功は蓋し覚束ない。釈迦孔子の如き人でさえもあの如く難行苦行を重ねた。まして常人に於てはである。

(四) 「行」といへばとて特別の事ではない。矢張それぞれの法を守り師長の教訓に遵ひて学問修養をなし身体を練ることをいふのである。故に願ある身には日常普通の生活事項が皆悉く「行」である。

(五) 人間の失敗は大抵薄志弱行に基する。意志弱くして心身の統一が出来ぬこと氣力乏しくして油断怠慢に襲はるること即ち緊張、努力、忍耐の足らぬことはそれが失敗の主なる原因である。願をたてて修行の道に上ることの大決心を要する所以は茲にある。

四 第三神戸中学校の教育精神

(一) 修行には修行場(道場)が必要である。今日の場合多くは学校を以て修行場とする。学校を修行場とするには其の学校の「教育精神」が自己の「願」と相会ふ所のものを選ばなければならぬ。いふまでもなく修行は自己の「願」と学校の「教育精神」とが互に感応して血脈相通ずることによりて始めて出来るのである。

(二) 第三神戸中学校教育の精神は至つて簡単で即ち「生徒のもつて生まれた天分を適当に発達せしめて中堅国民としての全き資格を有する人物」にするといふことである。

如何なる事が「中堅国民としての全き資格」であるかといふに

それには四条件を考へなければならぬ。

第一 健全なる人格的基盤の成立

第二 職業的方向の自覚

第三 生活指導原理の把握

第四 日常普通生活に有用の常識技能、体力の養成

第一の健全なる人格的基礎とは(1)智能(2)徳性(3)身体とが一つの全き個人的形態を成すに至るやう適当に調和統一して発達したるもののことである。我々の人格は終生を通して成長発達するもので青年時代には僅かに基礎を築くに過ぎないものである。

第二の職業的方向の自覚とは社会に對する責任の分担又は使命の自覚、更に他の語にていへば自己の得意の才芸を見出し之を基として生活の方向を定むることである。

第三の生活の指導原理とは複雑極まりなき生活界に処して其の生活を誤らざるが為に必要な規範觀念の形態をいふのである。是の如き觀念は社会的に価値のある、所謂合理的のものでなければならぬことは勿論常に指導性を有して判断の基準、思想の方針となり又公衆相互信頼の基礎となるものでなければならぬ。一や二の例をいへば国家に関する觀念又は国民性の特徴と見るべき家族主義の觀念、清明正直己を潔うし剛健勇武公に奉ずる觀念の如きである。

一は人間の基礎又は本体といふべく、二は其の方向又は作用といふべく、三は目的又は標準といふべく、四は日常生活の資料といふべきものである。

(三) 此の故に第三神戸中学校の教育には三つの重要な部分がある。第一は健全なる人格を築かしむること第二は職業的自覚を得しむること第三は指導精神を見出さしむること之である。

第一の健全なる人格を養ふことにつきては個人個人の長所短所を認めて適當なる教育を施さんとはするが大体に於て学、徳、体

の何れにも余り偏することなく発達せしむることを主眼とするのである。この故に体力のみを煉り学問を軽んずるとか学問の上達にのみ力を入れて徳性の発達を顧みないとか或は道德、人格のみを目的として身体や学問の方をおろそかにするといふやふなことは此の学校の学風ではない。

第二の職業的自覚を得しむることにつきては天は無用の人を造らずと古人もいひし如く何人にも恵まれたる一芸一才がありそこに又社会的使命もあるのであるから此の学校は其の才芸を見出さしめて之に適当な啓培を加えようとするのである。

第三の指導原理を把握せしむることにつきては生徒をして先ず夫の自らを知り親を知り家を知り郷を知り国を知り社会を知り世界を知りて然して後自己一代の生活を律する指導原理を見出さしむるに至らしめやうとするものである。

此の学校に於いては此の教育を完全教育と称し又地名にかたどりて神撫教育と号して居るのである。

五 神撫学徒の態度

(一) 神撫の教育を受くるには神撫学徒の態度を必要とする。神撫学徒の態度なくして神撫教育を受けんとするは木によりて魚を求むるより難き事である。

(二) 神撫学徒の態度とは

- 1 学校を神聖の道場と思ひ心を正しくし身を清めて教育を受けること。
- 2 父兄の恩義を思ひ孝順の心を厚くすること。
- 3 師弟の因縁のかりそめならざるを思ひ深く師を信ずること。
- 4 嚴重に規律規則を守り教訓指導に遵ひ人の居らざる所、見ざる所に於ても決して之に背戻せざること。
- 5 督促奨励を待たずして自ら発憤向上し素質機会を頼みとせ

新しい時代の学校づくりに関する一考察

六 学問の心得

- 6 外魔内魔を克服して素志を貫徹せずば断じて已まざるの意氣あること。

(一) 学問は直接に事物の有様を観察し又其の変化の道理を研究して知識となす力、或は先人の研究したる知識を理解して之を己の知識となす力、及び其等の知識を整理し貯蓄する力、組織し利用する力を養ふ仕事である。

何人にも特に恵まれたる一才又は一芸はあるものなれば之を発見して平生に於て培養を加へて以て職業的方向を自覚する力を養ふことも学問の目的の一つである。

学問して自己を知り人間を知り自然を知れば自ら人間の生活すべき真の道即ち所謂生活の指導原理を知ることが出来るやうになる。此の原理を悟ることが学問の最後の目的といつてもよいのである。

(二) 学問には知識芸術を生む力の「はたらき」に重きを置くやり方と其の「はたらき」の結果として生ずる知識芸術に重きを置くやり方と二色あるのであるが青年の時には前者即ち「はたらき」の方面、力を養ふことに重きを置く方がよいのである。

(三) 学問を為すには先づ其の学科の興味を見出さなければならぬ。如何なる学科でも熱心に勉強し理解を深くすれば必ず興味を発見し得るものである。然しともすれば我々は偶然の事より軽率に「すききらひ」をなして自己を誤ることも多いから注意を要する。興味を有せざる学問は発達の見込みがない。

(四) 学問は教室の中、書籍の上、筆墨の用のみある訳ではない。行住坐臥一切の生活の上にある。観察、実験、思考、計画、実行等皆重要な学問である。

(五) 先人の遺した知識を理解し記憶するに留まり自ら工夫を凝らして新しき研究を為し又は知識の応用を試みることをしないやうな学問は間違つた学問である。

(六) 学問は理解を第一とし記憶を第二とする。理解が十分であれば忘るるも可なれども理解が不十分のものを記憶に訴ふる如きは愚かな事である。記憶は無理な記憶よりも自然の記憶を貴しとするのである。自然の記憶は合理的の復習法によつて起るのである。

(七) 学問をするものは過食を忌み又疲労後を避け心身すがすがしき時全心を集中して一氣に之に当たたるを法とする。但し一度に余り多くの時間を勉強するのは法でない。又油ののつて来た時に突如やめるのも法でない。

(八) 練習及び復習は時間の事が大切である。時間の事とは(1)一日の中に於ける所用時間の位置。(2)所用時間の長さ。(3)所用時間と所用時間の隔たり等のことである。此の事につきては猶先生に聞くがよい。

(九) 学問する者は席次や成績を心配するよりも学問の方法はよいかわるいか又努力は十分であるか否かを心配すべきである。即ち結果を憂ふるよりも方法や努力を心配すべきである。試験や考查は畢竟するに生徒の為に行ふものであるから準備が出来たら自分より進んで受ける氣になる方がよい。

(十) 自己の天分、素質を詛ひて自暴自棄するものは努力の如何に貴いかを知らぬ愚物である。
以上の諸項につきては尚直接に先生の指導を受けよ。

七 修養の心得

(一) 修養の目的は主として徳性を涵養するにある。我々の徳性は意識的に又無意識的に日々成長を遂げて居るのであるが我々の注意に欠くる所あるか或は努力が足らなければ不健全なるもの

となりて一代を誤るに至る恐れがあるものである。

(二) 徳性の発達に最も關係を有する事項は大要次の如くである。

- 1 もちて生まれた心身の性質。
- 2 日常生活の間に於ける情念、言語、動作。
- 3 他人又は一般社会の感化影響。
- 4 善悪邪正を鑑別する心。
- 5 邪悪を恐れ遁れ正善に走り就かんとする心。
- 6 全心身を統御する心。

(三) もちて生まれた心身の諸性質は固より徳性の基をなすものであるが然し此の中には不健全な分子もあり又其の活動の如何によりては我自の性質の中に我自を滅す原因となるものさへなしとはいへないのである。

尚出来心といふものも時々此の性質の中より起つて来て折角出来たよき徳性を破壊することもある。

(四) 日常生活の間に於ける情念、言語、動作は知らず識らずの間につもり来て何時しか習慣をつくり性質を養ひ又其の人を制限し拘束して徳性の発達に至大の影響を及ぼすのである。此等の情念、言語、動作の多くは固より選ばれたる正善のものである筈なれども時として選ばれざるものが混入し我々の徳性の中に屢不純の要素を織り込むこともあるのである。

(五) 我々は又他人社会より断えず種々の感化影響を受けて居る。此等の感化影響には正邪善悪混同し陰性もあれば陽性もあつて徳性の発達を不純ならしむるばかりではなく誘惑となり障礙となつて取り返しのかね過ちを犯さしむるに至ることもあるのである。

(六) 此の如く我々の内外には種々の障碍影響を及ぼすものがあつて純正の徳性は中々発達しにくいものであるが他の一面には又其の徳性の発達を純正完全ならしめやうとする機関が我々の内部に二重にも三重にも具はりおりて徳性の発達に影響する諸事

情を整理し材料を精選組織して之が発達を誤らしめないやうにして居るのである。

(七) 徳性の発達を誤らしめないやうにする第一重の機関は正邪善悪を鑑別し選択する心である。斯の心は何人にも現有して居る。徳性の純正なる発達を希ふ我々は如何なる時にも其の心の麻痺しないやうに力めなければならぬ。事に臨み折にふれて疑惑、煩悶、不安の情念起り自分一人にて解決しがたき時は直ちに先生を訪ひて相談すべきである。

(八) 第二重の機関は第一重の機関たる弁別心によりて見つけ出した邪惡より逃げ遁れて正善に走り就かんとする情熱の心である。此の心は亦何人にも現存して居る。邪惡とは滅亡と災殃の使で恐るべき暗黒道であり正善は生命と福祥の使で喜ばしき光明道であるに拘らず我々には弱い所もあつてもすれば此の危険な方面に引ずられて行く事もある。第三重機関の必要は茲にある。

(九) 第三重の機関は学者が意志と称する一種の心の力で我々の全身心を統御する大將軍、人格建成本の總司令官ともいふべきものである。此の意志といふ力は本来何人にもあり又此の力が活くやうになれば決して徳性の発達を誤ることがないのであるが、我々の心から此の力を磨き出すには大なる努力を要する。

(十) 我々の心より眞の意味が現はれて来るやうになるには非常なる鍛鍊的修養を必要とする。意志鍛鍊の方法の一つは一行貫徹法である。一行貫徹法は先づ一行を選び忍耐と努力とを以て必ず之を貫徹し更に次の一行を貫徹するやうにすることである。此の法につきては先生に相談する方がよい。

(十一) 純正なる徳性が発達して人格の基礎が向上すれば邪惡の情念自ら消え心身共に明るく澄みわたった人物となり其の人格より高貴の氣品が自然に流れ出でて他人によき影響を及ぼし一般社会を浄化するに至るのである。斯くの如き人は多くの人より信

頼を受けて社会の公事にもたづさはり其の生活の安全をも保証せらるるに至るのである。

(十二) さりながら徳性涵養は中々容易の事ではない。誰かがいったやうに修養は確かに一つの戦、内魔外魔と戦ひて自己の内部に王国を建設する戦で随分困難な業である。さりながら青年に取りては夫れだけ又大なる興味でなければならぬ。何となれば人格建成、自己構造によりて大なる人物、立派なる人間たらんとするは人の天性であり自然の要求であるからである。故に若し青年にして此の興味を感じる能はざるものありとすればそれは余程薄弱な人か又は病的の人で学問の興味を感じる能はざるものよりも遙かに気の毒な人といふべきである。

(十三) 尚又人間には魔がさしたやうに一時の迷ひとか出来心とかいふやうなものが出て来たり或は偶然の事より思はぬ過失を犯すやうなこともあるものにて何人にも相当の失敗があるものである。失敗は勿論徳性の悪化、破綻である故に恐るべきものであるが然し失敗後の処置が当を得れば人格の建成は必ずしも廃滅に帰することがない。却つて寧ろ堅実を加ふこともある。

(十四) 失敗後の処置は主要次の如き方法によるべきである。
1 罪、過、穢を懺悔して心をも身をも洗い清むること。
2 更に勇を鼓して失敗を再びせざるやう心に誓ひ益々修養を励むこと。

(十五) 修養者の日常注意を要する事項

- 1 日常生活の間に於ける一切の規律言動は如何に小事なりとも其の守る所を失はぬやうにすること。
- 2 我利我欲我情我慢を慎むこと。
- 3 感情性癖を統制する練習をなすこと。
- 4 出来心を用心すること。
- 5 朋友の選択及び交り方を慎むこと。
- 6 失敗は直ちに処置して自己弁護に陥らぬやう用心すること。

と。事他人に關係する場合は遲滞なく漸謝すべきこと。

7 正しきこと善なることに趣味を有ちて私に社会奉仕をなし一日一善の如き修行を励むこと。

8 黙々たる大自然と語りつつ楽しんで勤勞の生活をなし得る性質を養ふこと。

9 快活にして然かも野卑に流れず、守るべきを守りて然かも頑固に陥らず、人をも容れ教へをも聞き自ら大国民たる風格を養ふこと。

10 世潮流風に対しては常に批判的に考へて見て濫りに流行の奴隸とならず、又徒に世を厭ひ人を嫌ふて非社会人とならぬやう用心すべきこと。
修養の事は常に父兄と相談して誤りなきを期さなければならぬ。

八 体育の心得

(一) 体育は身体を育養完成し且つ之を訓練して其の力を増大し生活活動に堪ふるに至らしむるを以て目的とする。

体育は身体の貴きを知り敬身の念を起すことより始まる。

(二) 体育には三段ある。

1 身体各部の調和的發育を遂ぐること。

2 病氣に遠ざかり健康を保持すること。

3 身体各部を強壯にし生活に必要な諸体力を養ふこと。

(三) 体育の範圍は甚だ広い。飲食起居の事より日々の動作仕事、心の持ち方、周囲の調度物品等の一切を含んで居る。

(四) 体育の方法は今一々茲に挙げ難いが要するに消極的には日常生活の規律及び衛生上の法則を守り積極的には体操運動及び諸種の体育的仕事を実行し又光線、空氣、水、寒さ、暑さ、等の自然物自然力を利用することである。

特に注意すべきは基本的諸種の体力を養ふこと、巧緻なる諸

運動の練習をなすこと、姿勢特に脊柱を正しくすること、各部の硬化を防ぐこと等である。

(五) 是等の方法は矢張「興味」を以て実行するにあらざれば其の効力は少い。

(六) 次に体力上重要なことは断えず自己の身体を研究して其の特性及び変化を知り以て其の發育を助け体力の充實を図り疾病を未然に防ぐことである。

(七) 体操運動等の法則は勿論一般体育の原理法則を理解し其の適用実行を誤らぬやう努むべきである。

(八) 天賦の能力豊にして選手的趣味と希望とを有するものは選手たるも差支へなし。但し選手は、代表的性質を有するものなれば此の意味を了解し高潔なる品性と最善の努力とを以て出来る丈の代表価値を發揮すべきである。

九 日常の規律

(一) 言語、態度、服裝等凡て定法に遵ひ品格を重んずべきは勿論途中車中に於ても交通の規則を守り見苦しき振舞あるべからざること。

病氣其の他の事情にて異なりたる服裝をなす必要ある時は學級係に届け出づること。

(二) 特別に許可を得たる場合にあらざれば興業場、飲食店、其の他禁ぜられたる場所に入出するべからざること。

(三) 妄りに金錢物品の貸借をなし又承諾を得ずして他人の物品を使用すべからざること。

(四) 欠席は便宜の方法により事情を具して必ず届け出づべく又万已むを得ざる場合の外なるべく遅刻早引をなさざること。

(五) 住所、身分、保護者等に異動を生じたる時は遲滞なく届け出づること。

(六) 父母上親戚知人學友に対しても定められたる式により敬礼を

行ふこと。

- (七) 飲酒、喫煙等をなさざること。
- (八) 所有品に名前を記入し指定の場所に置くこと。
- (九) 校舎校具を大切に使用すること。誤りて校舎、校具等を破損したる時は直に届け出て其の指揮を受くること。
- (十) 集会の催し金銭の拠出をなし又、雑誌、パンフレット様のものを作らんとする時は学級係の許可を受くること。
- (十一) 旅行をなす時は予め届け出づること。
- (十二) 使用料は一定の期日に必ず銀行又は指定せられたる所に納付すること。
- (十三) 他校の入学試験を受けんとする時は予め学級係に届け出づること。
- (十四) 伝染病に罹りたる時又は怪我したる時は必ず届け出づること。
- (十五) 不良少年などに強迫又は誘ひを受けたる時も必ず届け出づること。
- (十六) 学校よりの掲示に注意すること。
- (十七) 役員、当番の仕事を怠らざること。
- (十八) 恐怖、心配又は不安に堪へない事ある時は直ちに先生に相談すること。
- (十九) 出来心又は無意識にして過失を犯し不良の行為を為したる時は直ちに先生に告白して善後の方法を講ずること。
- (二十) 費用を節約してぜいたくの物を購入せざること。

尚生徒は左記のことを能く心得置くべきこと。

- (一) 校規に背き師令を軽んじてなすべからざるべきことをなし又は学問修養を怠り然も確実に悔い改めたる情状の見えざるものは教育を受けんとする誠意なきものにして其の心に於て既に「退学」して居るものなること。

其の心に於て「退学」して居るものは教育を施すべき道なきを以て退校を命ずること。

- (二) 仮令学問体格優良なりとも徳性に於て大いに欠けたる所ある者は進級又は卒業を許さざること。

十 卒業の眞の資格

左の三条を具備するに至らざれば神撫教育卒業の眞の資格とはいへない。

- (一) 学、徳、体、三要素の調和的発達に基ける人格的形成の成立。
 - (二) 適性所長に基ける職業的方向の自覚。
 - (三) 生活の指導原理たるべき觀念の把握。
- (昭和六年十月五日発行)

近藤英也校長在職期間は大正十年(一九二一)から昭和十一年(一九三六)の十五年間である。その間薫陶を受けた主な神戸三中OBの個性派の面々は、映画評論の淀川長治、ジャズ評論の油井正一、彫刻家の柳原義達、関西財界のまとめ役石原信一、『暮しの手帖』を創刊した花森安治、『株式会社神戸市』の名を高めた神戸市長宮崎辰雄、国際ジャーナリストの大森実、元ダイエー社長中内功など枚挙にいとまがない。豊岡中では今東光との師弟の関係もあった。

近藤英也校長が推進したダイナミックな「全人教育」には、今日の当面している種々の教育課題、例えば、教育環境づくりとしての「個性尊重」の教育、「開かれた学校づくり」の観点から「学校評議員制度」の問題等があるが、当時既に、保護者と学校との連携組織としての「父兄常務委員会」を発足している。当時としては画期的な級会(現在のHR)を導入し、週一回の話し合いの時間を活用させ、表現力や批判力を身に付けさせている点などは、時代背景が大きく違ふとはいえ、今日にも十分に通用する示唆に富む教育実践ではなからうか。

近藤校長の教育指導の根本には、「十二歳から十八歳までの間は、人

生のうちで生理的にも、精神的にも一大変化を起こす時期である。この時を一步誤れば取り返しがつかなくなる。一家一代無茶になるものを源にする。身体ばかり大きくなり、学問ばかりして、それで人間の栄枯盛衰は定まらない。人間の魂をつけなければなりません。」という教育哲学があった。卒業に当たっては、智、徳、体の人格的形成や職業的方向の自覚そして生活の指導原理たるべき觀念の把握という三条件が具備していないと卒業の眞の資格はあり得ないとの見解を示し、個性尊重と進路指導の両立にも取り組んだのである。熱血名校長である近藤校長の当時の新しい時代に即した「学校づくり」であり、「個性尊重」をうたい、当時として画期的な「魂の教育」の必要性を第一に掲げた教育実践には、今後の教育にも大きな示唆が込められていると考えるものである。

三 今日最大の教育的課題「不登校」

近藤英也校長は既に、当時にも於いても「学問の心得」や「修養の心得」で、学習の仕方で迷ったり、折にふれて疑惑、煩悶、不安がある場合は直ちに先生に相談しなさいとカウンセリングマインドでの生徒指導を行っている。学習環境の確立に当たって心身共に成長期にある生徒たちに細心の配慮が為されている。近藤校長の姿勢は現在においても不易の部分として大事な視点である。

さて、「文部科学省・不登校問題に関する調査協力者会議」からの「今後の不登校への対応の在り方について」（報告）が平成十五年四月十一日に公表された。これによると、「不登校」を理由として三十日以上欠席した小・中学校の不登校児童生徒数は、平成十三年度には約十三万九〇〇〇人（小学校二万六五一一人、中学校十一万二二一人合計十三万八七二二人）に上っており、過去最多を更新し続けているという。^{（注5）}ここでは、不登校の要因・背景の多様化・複雑化について述べて見みたい。

不登校の背景と一般的な社会の傾向等について、近年の子どもたち

の社会性等をめぐる課題、例えば、自尊感情に乏しい、人生目標や将来の職業に対する夢や希望等を持たず無気力な者が増えている、学習意欲が低下している、耐性がなく未成熟といった傾向が指摘されている。

また、学校に行かなければならないといった義務感や、学校へ行かないことに対する心理的負担が薄れてきている傾向も指摘されている。

「不登校経験者の実態調査」では、「学校へ行きたかったが、行けなかった」という葛藤を抱える事例は少なくなく、不登校当事者自身も悩み苦しんでいることが分かるが、一方で、「学校へ行かないことに何ら心理的負担はなかった」、「自分自身は不登校を悪いこととは思わないが、他人の見方が気になった」といった者が相当の割合を占めている。なお、こうした回答の中に、家庭や地域などの「他人の見方」によつて不登校児童生徒が心理的に強い圧迫を感じるような事例や、様々な事情でやむを得ず欠席に至っている事例があることを忘れてはならないとしている。^{（注6）}

「平成四年度報告」が指摘するように、不登校は、特定の子どもに特有の問題があることによつて起こるという固定的な概念でとらえるのではなく、「どの子にも起こりうる」ものとなっているという現代の社会状況等も視野に入れ、近年の子どもたちの状況を正しく把握した上で総合的かつ効果的に対策を講じることが必要である。

保護者の側については、近年の都市化、核家族化、少子化、地域における人間関係の希薄化などを背景に、一部では、無責任な放任や過保護・過干渉、育児への不安、しつけへの自信喪失など、家庭の教育力の低下が指摘されている。これらは先に述べた子どもたちの社会性等をめぐる問題の背景ともなっている。また、保護者自身にゆとりがない等の傾向や、学校に通わせることが絶対ではないとの保護者の意識の変化等についても指摘されているところである。

学校については、学業不振や友人関係等に関する学校生活上の問題、

例えば、学校におけるいじめや暴力等の問題、更には個を大切にし、学ぶ意欲を喚起する等の配慮が十分に行きとどかないような教育活動や教職員の児童生徒に対する共感的理解の不十分な例なども指摘されており、学校の取り組みとして改善すべき余地があると考えられる。

特に、いじめについてはいじめを苦にした自殺が相次いで発生するといった深刻な様相を呈した後、改善の兆しが見られるようになったものの、依然として発生件数は相当数に上っている（平成十三年度二万五〇三七件）。また、暴力に関しては、近年増加傾向が続き、平成十三年度は初めて減少したものの、取り組みの一層の充実が求められている（平成十三年度三万三三〇件）。

このように学校をめぐる様々な課題が存し、不登校児童生徒が増加してきている一方で、多くの児童生徒は、学校を楽しんでいる（小学校九二・四％、中学生八九・二％）。学校関係者には、こうした児童生徒の声の背後にある期待や切実な願いに答えていくことが求められている。一部では受験競争等のストレスが不登校の増加の背景にあるとの指摘もなされている。両者の関連性は明らかではないが、こうしたストレスの問題については、学校・行政それぞれの立場から、教育相談体制や進路指導の充実、入学者選抜の改善等の取り組みを進めることによって適切に対応していくことが望まれますと記してある。

不登校との関連で新たに指摘されている課題としては、児童生徒をめぐる課題の中には、最近の社会的関心の高まりに伴って、不登校との関連性が注目されるようになってきているものが見られる。

学習障害（LD）、注意欠陥／多動性障害（ADHD）等の児童生徒については、周囲との人間関係が構築されない、学習のつまづきが克服できないといった状況が進み、不登校に至る事例は少なくないとの指摘がある。最近文部科学省が教員を対象に行ったアンケート調査の結果によれば、LD、ADHD等の児童生徒は、小・中学校の通常の学級の在籍者の約六％に達するとの見方がある。

保護者による子どもの虐待については、近年深刻の度を増してきて

おり、平成十三年度の児童相談所における相談処理件数は二万三七四件に達している。虐待を受けた子どもの約半数は小・中学生が占めており、虐待の内容は、身体的虐待、性的虐待、保護の怠慢、拒否（ネグレクト）、心理的虐待と様々である。このうち、ネグレクトには、保護者が学校へ行かせないなど登校を困難にするような事例が含まれており、不登校の背景にそうした疑いがあるものも見られる。いずれの種類の虐待であっても、子どもの心身の成長に重大な影響を及ぼすものであり、人間関係をつくれなかつたり、非行に走る要因になることなどが懸念されるとしている。

もちろん、LD、ADHD等の発達障害のある児童生徒や虐待を受けた子どもたちが直ちに不登校になるということでは決してないが、これらの課題に適切な対応をとることは、不登校対策上、重要な意味を持つものである。

このように、個々の児童生徒が不登校となる背景にある要因や直接的なきっかけは様々であり、また、不登校の状態が継続している間にもその要因や背景が時間の経過と共に変化する、本人にもはつきりとした理由が分からない場合が少なくない等、不登校の要因や背景は一つに特定できないことが多い。こうした点は、個々に不登校の事例についてはもちろん、社会全体の不登校児童生徒数の増加を論じる上でも留意する必要がある。

不登校に対する基本的な考え方として、将来の社会的自立に向けた支援の視点として、不登校の解決の目標は、児童生徒が将来的に精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるよう、その社会的自立に向けて支援することである。

その意味においても、学校に登校するという結果のみを最終目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的にとらえ、社会的に自立することを目指すことが必要である。不登校の時期は児童生徒にとって、場合により、いじめによるストレスから快復するための休養期間としての意味や、進路選択を考える上で自分を見つめ直す等の積

極的な意味を持つと同時に、不登校による進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクがある場合もある。こうした点は、不登校経験者の声からも確かめることができる。(「不登校経験者の実態調査」^(注10))。

自らの不登校経験に対する意識を見ると、成長した点等を積極的に評価する回答がある一方で、「生活のリズムの崩れ」、「学力・知識不足」、「人間関係に不安」等を理由に、後悔したり、様々な苦労を経験したという回答も相当数あるという。なお、卒業後に進学や就労など様々な体験を経ることによって、多くの者が進路の形成を図りつつ将来への夢や希望を持ってきたということに留意しておきたいとしている。

関係者は、こうした点を認識した上で、児童生徒の将来の自立に向けた支援をする必要がある。その意味から、不登校を「心の問題」としてのみならず「進路の問題」としてとらえ、どのように対応するかが大切な課題である。こうした観点から、義務教育段階にある不登校児童生徒、更には中学卒業後に「ひきこもり」状態にあるなど、進学も就労もしていない青少年に対し、「心の問題」の解決を目指した支援のみならず、本人の進路形成に資するような指導・相談や、それに必要となる学習支援や情報提供等を積極的に行うことが重要であると述べている。^(注11)

更に、「連携ネットワークによる支援」、「将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割」、「働きかけることや関わりを持つことの重要性」、「保護者の役割と家庭への支援」が述べられている。^(注12)

「保護者の役割と家庭への支援」については、家庭はすべての教育の出発点であり、人格形成の基礎を培う重要な役割を担っており、家庭の教育力の充実を目指して様々な施策の推進を図ることは極めて重要である。しかし、不登校の解決を目指す上では、不登校の原因を特定の保護者の特有の問題のみに見出そうとするのではなく、子育てを支える仕組みや環境が崩れている社会全体の状況にも目を向けつつ、不登校児童生徒の保護者の個々の状況に応じた働きかけをしていくこと

が大切であると考えられる。

不登校の要因・背景は多様化しており、虐待等の深刻な家庭の問題を抱えて福祉や医療行政等と連携した保護者への支援が必要な場合もあれば、子どもの非行への対応、基本的な生活習慣や教育環境の改善のための支援を必要としている場合や、保護者自身がしつけや子育てに対する自信がなく支援を必要としている場合もある。また、不登校となった子どもへ対応するための十分な情報を保護者が持たずに悩んでいる場合がある。

このような保護者を支援し、不登校となった子どもへの対応に関してその保護者が役割を適切に果たせるよう、時機を失することなく児童生徒本人のみならず家庭への適切な働きかけや支援を行う観点から、学校と家庭、関係機関の連携を図ることが不可欠である。その際に、保護者への働きかけが、保護者の焦りや保護者自身を追い詰めることにつながり、かえって事態を深刻化させる場合もあることから、保護者に対しては、児童生徒への支援等に関して、共通する課題意識を持つて取り組むという基本的な関係をつくることが重要である。その意味から、不登校に関する相談窓口に関する情報提供、不登校児童生徒への訪問等における保護者への助言、不登校児童生徒の保護者が気軽に相談できる体制を整えること等が教育関係者等に求められる。

その際に、「親の会」等の既存の保護者同士のネットワークとの連携協力を図ることや、そのような保護者同士のネットワークづくりへの支援をすることにより保護者を支援すること等考えられる。

保護者との関係においては、「支援する」といったことだけではなく、「親の会」に学校の教員やスクールカウンセラー等が積極的に参加し、保護者の経験から学ぶなど、関係者が意見交換をするという姿勢が大切である。

不登校となった児童生徒の保護者のみならず、保護者全般に対する不登校への理解を深めるためのセミナー等による啓発を行うことや、就学時検診や乳幼児検診等の保護者が集まる機会を活用した子育て講

座、思春期の子どもを持つ保護者向けに作成された資料等の活用など、子育てについての悩みや不安を持つ保護者に対する支援の充実を図ることが期待される。

学校の取り組みとしては、

「魅力あるよりよい学校づくりのための一般的な取り組み」として、

①新学習指導要領のねらいの実現、

②開かれた学校づくり、

③きめ細かい教科指導の実施、

④学ぶ意欲を育む指導の充実、

⑤安心して通うことができる学校の実現、

⑥児童生徒の発達段階に応じたきめ細かい配慮が指摘されている。^(注13)

「きめ細かく柔軟な個別・具体的な取り組み」として、

①校内の指導体制及び教職員等の役割（学校全体の指導体制の充実・コディネーター的な不登校対応担当の役割の明確化・教員の資質の向上・養護教諭の役割と保健室、相談室等教室以外の「居場所」の環境条件整備・スクールカウンセラーや心の教室相談員等との連携協力）

②情報共有のための個別指導記録の作成

③家庭への訪問等を通じた児童生徒や家庭への適切な働きかけ

④不登校児童生徒の学習状況の把握と学習の評価の工夫

⑤児童生徒の再登校に当たっての受け入れ体制

⑥児童生徒の立場に立った柔軟な学級替えや転校等の措置^(注14)

不登校児童生徒の実態に配慮した特色ある教育課程の試みとして、不登校児童生徒の実態に配慮した特色ある教育課程については、学習指導要領等の基準によらない教育課程の編成・実施を特例的に認める研究開発学校制度の活用により、不登校児童生徒を対象とした分教室における特別のカリキュラムの編成などに関する研究が行われているところであり、引き続きその推進が期待されるとしている。

関係機関との連携による取り組みとしては、「入所・通所型の施設の取り組み」として、

①適応指導教室の整備充実（・適応指導教室の整備充実と整備指針の策定・適応指導教室の指導体制の充実・地域ネットワークにおける中核的機能の整備）

②社会教育施設の体験活動プログラムの積極的な活用

③公的機関と民間施設やNPO等との積極的な連携

「訪問型の支援取り組み」として、

①公的な機関等による訪問型の支援の推進

②訪問型の支援の実施に当たっての配慮

「ITの活用」として個別学習ソフトの開発などの試みも見られるものの、今後なお一層の研究を進めていくことが必要であるとしている。^(注15)

以下に、文部科学省が調査した項目で岩手県の不登校に関する態様、不登校に陥ったきっかけ、指導の結果好ましい変化の見られた生徒、回復に効果のあった指導方法等を記してみる。

○岩手県の場合、不登校の態様は、

小学校では

一位が様々な原因が複雑に絡み合った複合型（三八・七％）、

二位が情緒不安定型（三八・七％）、

三位が無気力型（一四・七％）。

中学校では

一位が情緒不安定型（三八・七％）、

二位が様々な原因が複雑に絡み合った複合型（二八・九％）、

三位が無気力型（一七・二％）。

高等学校では

一位が情緒不安定型（三十・七％）、

二位が様々な原因が複雑に絡み合った複合型（一七・七％）、

三位が無気力型（一六・九％）となっている。

○さらに、不登校に陥った直接のきっかけは、

小学校では

- 一位が本人に関わる問題（二七・一％）、
- 二位が親子関係を巡る問題（一八・二％）、
- 三位が友人関係の問題（一二・九％）。

中学校では

- 一位が本人に関わる問題（三一・二％）、
- 二位が友人関係の問題（二四・八％）、
- 三位が学業不振（六・〇％）。

高等学校では

- 一位が本人に関わる問題（三三・七％）、
- 二位が友人関係の問題（一五・七％）、
- 三位が学業不振（一〇・六％）。

この調査項目の選択肢は、友人関係を巡る問題
 ・教師との関係
 を巡る問題
 ・学業不振
 ・部活動等への不適応
 ・学校のきまり
 等を巡る問題
 ・入学、転編入、進級時の不適応
 ・家庭生活環境
 の急激な変化
 ・親子関係を巡る問題
 ・家庭の不和・病気による
 欠席
 ・その他本人に関わる問題
 ・その他となっている。

○指導の結果好ましい変化の見られた生徒の割合は
 小学校五三・三％ 中学校四九・五％ 高等学校三八・四％となつ
 ている。

○恢復に効果のあつた指導方法としては、

- 小学校
- ・登校を促すため、電話をかけたたり迎えに行くなどした。
- ・保護者の協力を求めて、家庭の親子関係や家庭生活等
 の改善を図った。

- ・不登校の問題について、研修会や事例研究会を通じて
 全教師の共通理解を図った。

中学校

- ・家庭訪問を行い、学業や生活面での相談にのるなど様
 々な指導援助を行った。
- ・保健室等特別の場所に登校させて指導に当たった。

・登校を促すため、電話をかけたたり迎えに行くなどした。
 高等学校・登校を促すため、電話をかけたたり迎えに行くなどした。

・家庭訪問を行い、学業や生活面での相談にのるなど様
 々な指導援助を行った。

・保護者の協力を求めて、家庭の親子関係や家庭生活等
 改善を図った。

（上記以外で効果のあつた学校側の措置）

◇ 全ての教師が当該児童生徒に触れ合いを多くするなどして
 学校全体で指導に当たった

◇ 日頃の指導のなかで教師との触れ合いを多くするなど児童
 生徒と教師との関係改善を図った。

◇ 学習活動を含む様々な活動の場面で本人が意欲をもって活
 動できる場を用意した。

◇ スクールカウンセラー、心の教室相談員等が専門的に相談に
 当たった。

岩手県の場合、不登校の状況は平成十四年度は十三年度に比較し減
 少に転じ、比率においても全国と比較して低い状況にあるが、小・中・
 高等学校合わせて約一、八〇〇人の児童生徒が不登校に苦しんでいる
 状況であり、依然として最大の教育課題であることには変わりがない。
 ただ、今回減少に転じたことを契機に、学校と保護者、スクールカ
 ウンセラー等の専門家の方々と関係機関との連携を一層緊密にするこ
 とによって、改善が図られることを期待するものである。

四 新しい時代の学校づくり

平成十年九月に出された中教審答申「地方教育行政の在り方」の中
 で提案された「学校評議員制度」の趣旨について、次のように述べて
 いる。

「学校が地域住民の信頼にこたえ、家庭や地域が連携協力して教育活
 動を展開するためには、学校を開かれたものとするとともに、学校の

経営責任を明らかにするための取り組みが必要である。このような観点から、学校の教育目標とそれに基づく具体的な計画を、また、その実施状況についての自己評価を、それぞれ、保護者や地域住民に説明することが必要である。」

ここで表出されているように、今後、中学校や高等学校においても教育活動と学校運営の両面で、地域社会に向けて開かれた関係を構築していかなければならない。そのことによって、学校はこれまで指摘されてきた閉鎖性を改善し、地域住民の信頼に応え、家庭や地域と連携協力して生徒の人間の成長をより確かなものにする事ができると考える。そうした意味で、開かれた学校づくりを進めるということが、教育の世紀といわれる今日重要な課題となっているのである。

岩手県の県立高校では平成十六年度四月からすべての高校で学校評議員制度を導入すると聞いている。学校評議員制度は、学校運営に保護者や地域の関係者等の協力を得ようとする取り組みでもあり、新しい「学校づくり」の観点からも校長の手腕に期待できるシステムである。

今回の教育課程の基準の改定で創設された総合的な学習の時間の指導が目指すものは「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」であり、「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」である。いわば青年が一人の人間として生きていく上に欠かすことができない学びや生活における自立的能力、態度の育成にあるということができよう。

総合的な学習の時間の指導や学習が期待通りの成果を上げることができるための、最大のポイントは、中学校、高等学校の教師が専門教科の枠を超えて、総合的な学習の時間の運営に参加し、協力できるか否かにかかっている。

学校における教育課程の編成や実施のための人的組織や情報のネット

トワーク、地域の人々との協力体制等をどうするか。新世紀の学校教育改善の重要な課題である。

校長が「本校では基礎・基本をこのように考え、このように教育課程で取り上げ、このように指導と評価を行っている」ということが保護者や地域の人々に対してはつきりと説明できるようにすることが大変重要である。新しい時代の学校づくりは、今回の新しい学習指導要領に基づき、新しい教育課程を編成し、実施し、中学校教育や高等学校教育の改善と充実を図ることに重要な意義があると考ええる。

おわりに

冒頭にも記したように、教育改革の波が学校現場には次々と押し寄せており、一方、不登校等の学校不適応の問題も増減を繰り返しながら、未だ問題の解消には至っていないのが実態である。

しかし、考えてみれば、何時の時代も問題や課題を内在させながら、教育は粛々と営まれてきているのではなかったか。これまでも順風満帆という時期はあったかもしれないが、疾風怒濤の中にいる時の方が多いのが教育ではなからうかと思う。

そのような時ほど、校長は教育哲学をもち、先頭に立ってリーダーシップを発揮し、教職員と一体となり、相互の信頼関係のもとに、新しい時代の担い手である生徒たちの指導に当たり、教育を推進するということとは教育者としてこの上ない喜びであり、崇高な仕事でなからうかと思う。そのような観点から、旧制第三神戸中学校の初代近藤英也校長の教育理念は生徒を学校の中心に据えた「全人教育」「魂の教育」という視点で先駆的な「学校づくり」であり、現在当面する諸課題を解く大きなヒントになるものと確信しているところである。

最近の報道によれば、経済協力開発機構（OECD）が加盟国を中心に三十二か国の十五歳男女生徒約二六万五、〇〇〇人を対象に実施した国際学習到達度調査（略称PISA）副題「生きるための知識と

技能」の結果が公表された。覚えた知識や技能を実生活の上でどれだけ生かせるのか、その力を見ようという初の国際調査で、日本は平均点で「数学的応用力」が一位、「科学的応用力」が二位、今回重点調査した「読解力」が総合八位という内容の報道だった。「読解力」の一位はフィンランド。TVでは、フィンランドの国語の時間が放映されていた。やはり、生徒の心に火を灯すのは先生であつた。先生は教材研究を自宅でも徹底的に行い、授業の実際では、生徒の表現が次第にテーマの核心部まで届き、日常の生活で改善すべき点まで高揚していくものだった。

手がかりになるべきポイントだけは教師が話し、論理的な整理やまとめなどは二ないし三名の生徒のグループが行う。表現力や批判力が着実に身に付いていく学習であり、知識が知恵に変容していく授業であると思つて視聴していた。

フィンランドの指導に当たる教師の地球規模の幅広い教材研究が生徒たちの求知心をくすぐり、生徒たちが真剣に様々な情報を収集して発表にまで至る学習の姿勢は、日本の教育の今日的課題を解消するヒントとして、これからの日本の教育に大いに参考になったのではないかと感じた次第である。

中学校や高等学校がダイナミックに変容するきっかけは教師の指導計画や指導案の中にあると思つているが、その眼目はやはり日頃の授業が生徒たちにとって充実していることに尽きると考えている。

注

- (注1) 菊池達也著『今東光物語』一三九頁。
- (注2) 菊池達也著『今東光物語』一四一頁。
- (注3) 菊池達也著『今東光物語』一四三頁。
- (注4) 兵庫県立長田高等学校「開門章」一頁。
- (注5) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』五頁。

- (注6) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』四頁。
- (注7) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』七頁。
- (注8) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』七頁。
- (注9) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』八頁。
- (注10) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』九頁。
- (注11) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』九頁。
- (注12) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』七頁。
- (注13) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』七頁。
- (注14) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』七頁。
- (注15) 『今後の不登校への対応の在り方について(報告)』七頁。

参 考 文 献

- 『開門章』旧制第三神戸中学校(現兵庫県立長田高等学校)
- 『今東光物語』菊池達也著 日本図書刊行会
- 文部科学省・不登校問題に関する調査協力者会議「今後の不登校への対応の在り方について」(報告)
- 中等教育資料平成十三年一月号文部科学省教職課程編集
- 中学校学習指導要領(平成十年十二月)解説―総則編―文部省
- 高等学校学習指導要領解説 国語編 平成十一年十二月 文部省